



# 営農情報

第101号 令和2年10月30日

## 「あまおう」11月の管理

南筑後・久留米普及指導センター  
福岡大城農業協同組合

10a 当たり収量 5t 以上を目指しましょう

### 生育状況

定植後の乾燥の影響で、生育は例年より5日程度遅れており、早期作型で出蕾から開花、普通作型であと1～2枚で出蕾の状況です。2番果房の花芽については、果房間葉数が早期作型で3～6枚程度、V型・普通促成で3～5枚で分化しています。また、定植後の生育が緩慢だったことから、普通作型を中心に早進株の発生も多く見られます。

病害虫では、一部のほ場で炭そ病の発生やアザミウマ類やハスモンヨトウ、アブラムシ類が散見されます。

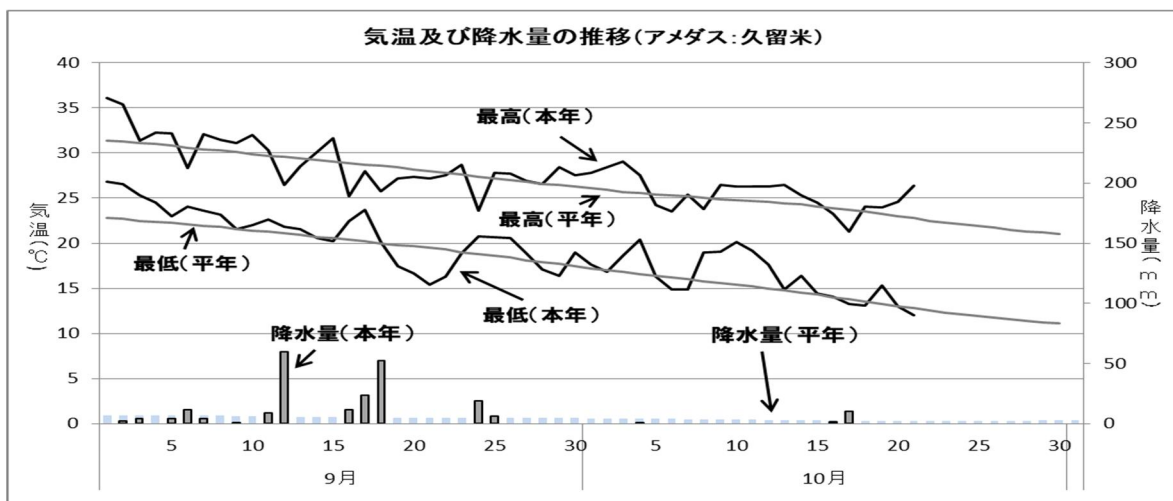


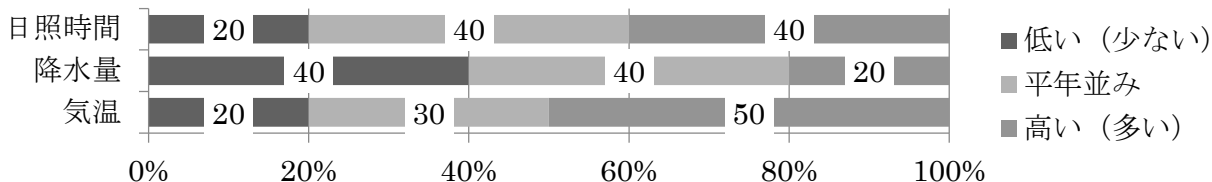
図1 気温と降水量の推移 (アメダス久留米)

### 気象予報と今後の見通し

#### (1) 気象予報

福岡管区気象台が発表した1か月予報は次のようになっています。

- 1か月予報 (九州北部地方 予報期間：10月24日～11月23日 発表日10月22日)



#### (2) 今後の見通し

11月の天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多い見込みです。

### 今後の管理のポイント

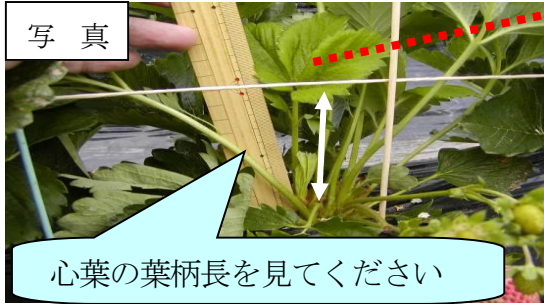
- ① 急に株を立ち上がらせたり、落ち込ませない。
- ② 灰色かび病・菌核病の発生防止

#### [対策]

- ① 早過ぎる電照開始やハウスの閉め込みは株の徒長の原因となる。適期管理を徹底する。
- ② 降雨前の防除。換気による過湿の解消。

## 草勢管理

11月は1番果房の着果負担がかかるため、“成り疲れ”させないよう草勢を維持（心葉展開時の葉柄長により判断）することが重要になる。



### 【心葉展開時の葉柄長による草勢判断】

草勢	弱い	適切	強い
心葉の葉柄長	9cm以下	9～12cm	12cm以上

電照時間	時間を長く	現状維持	時間を短く
------	-------	------	-------

電照は、11月10～15日から1～2時間で開始し、その後は、心葉展開時の葉柄長を目安に時間を調節する。ただし、頂果がすでに着色期の場合や生育が遅れているほ場（特に普通作型）では早めに電照を開始する。

※ 電照効果は1週間～10日後に現れるので、着果負担など生育を予想して時間を調整する。

※ 11月中旬～12月上旬は、3番果房の花芽分化期と考えられるため、生育旺盛になりすぎないように注意する。また、電照開始時期が早すぎると、3番果房の花芽分化が遅れるので注意する。

## 温度管理

○頂果の状況に応じて、温度管理を変える（表1）。株が小さく生育が遅れている場合は、高めの温度管理を行い生育を促進する。収穫中は低めの温度管理とし、果実肥大を促し品質向上を図る。

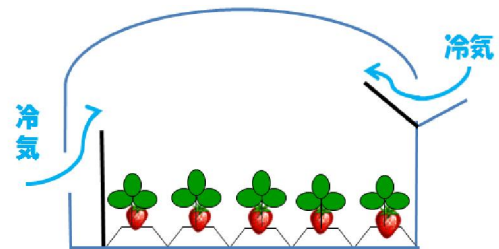
○外気の夜温が10℃を下回るようになったら（通常11月上中旬）、夕方、ハウスを閉め込む。ただし、ハウスを閉めこんだ後に夜温が10℃を上回る場合は、夜間ハウスを開放する。

○加温機の準備  
・加温機は早めに準備し、使用前には点検・清掃を行い、急な冷え込みに備えておく。

○ハウスの保温性向上  
・ビニルは、破れや隙間がないか点検、補修する。  
・株に直接冷気が当たらないよう、谷やサイドに冷気よけのビニルを張りワンクッション換気を行う。

【表1：1番果房の生育状況別温度管理の目安】

頂果の状況	昼間	夜間
～着果期	26～28℃	10℃
着果期～白熟期	24～26℃	7～10℃
白熟期～収穫期	20～24℃	5～7℃



## 摘果

○摘果は、2番果房が出蕾した後、生育状況に応じて行う（表2）。

○1～2番の果房間葉数が2枚以下の「早進株」を認めた場合は、草勢維持のために強めの摘果を行い、2番果房と合わせて1株当たり10～12果に着果数を制限する。

(着果数が多い場合、小果が不受精になりやすく株も弱りやすい。)

【表2：1番果房の摘果後の着果数の目安】

1～2番果房間葉数	4～5枚	6～8枚	9枚以上
1番果房の着果数	7～9果	10～12果	枝花のみ摘果

### かん水・液肥

- かん水や液肥は、草勢が低下しないよう定期的に行う。
- かん水の目安として、pF値1.7～1.8で管理する。ハウス内の極端な乾燥は、生育遅れとハダニ類多発の原因となる。
- 液肥は、窒素成分で月に1.5～2kg/10aを、3～4回に分けて行う。(液肥開始の目安 早期：収穫始め、普通期：11月下旬以降)生育が悪い場合は早めに施用を始める。
- 収穫期間中のかん水は、収穫後に行う。

### 玉出し・わき芽除去

- 頂果の着色が開始する前までに、軽く玉出しや葉よけを行う。「あまおう」は果梗が折れやすいため、作業の際は果梗が折れないよう注意する。葉が裏返るほどの葉よけを行うと、光合成の効率低下や株にストレスがかかるため、果実に葉が被らない程度に軽く行う。
- 玉出し作業と同時に、わき芽やランナーを除去する。

### 発根促進

- 開花後は、着果負担により根量が減少するため、発根促進剤を活用し、できるだけ多く発根を促す。

### 病害虫防除

#### 【うどんこ病】

- ビニル被覆後は特に発生しやすくなるので、定期的に農薬の予防散布を行う。
- 軟弱徒長にならないよう、極端な多肥や蒸し込み管理を避け、換気を良くする。
- 発病を確認したら発病葉・発病果は速やかに除去し、多発ほ場ではやや低めの温度管理とする。

#### 【灰色かび病・菌核病】

- 一度発病すると防除が困難であるため、定期的に農薬の予防散布を行う。
- 発病果実や発病葉は、見つけ次第除去する。
- ハウスの換気を十分に行う。

#### 【ハダニ類】

- 葉裏にしっかりと薬剤がかかるように、丁寧に散布する。
- 一番果房収穫後の防除を徹底する。
- 天敵ダニを導入する場合は、導入前にダニをできるだけ減らすとともに、適期に導入するよう心掛ける。

#### 【ハスモンヨトウ】

- 年内は、定期的に防除を行うようにする。

#### 【アザミウマ類】

- 年内に飛び込んできたアザミウマ類を防除し、ハウス内で越冬させないことが重要である。

#### 【アブラムシ類】

- ほ場周辺の雑草の除去を行う。今年は、育苗期からの持ち込みも多い傾向にあるため、年内での防除を徹底する。

**農作業の安全と農薬の適正使用及び飛散防止対策を徹底しましょう！**

# トピックス 「秋ランナーを使用しましょう！」

今年は育苗期の降水量が多かったことから炭そ病の感染ほ場率が例年より高い傾向にあります(表3)。炭そ病に感染した親株を使用すると、次年度の育苗期にも感染が拡大する可能性が高まります。下記を参考に秋ランナーを積極的に活用し、次年度に向けた炭そ病対策を徹底しましょう。

	R2	R1	平年
潜在感染株率(%)	25.1	19.2	36.5
潜在感染株確認ほ場率(%)	100	75	87.9

表3 福岡県内の炭そ病発生状況(7月2半旬調査)  
「福岡県病害虫防除所発生予察情報」より

## ◆秋ランナーとは

ビニル被覆後に定植株から発生したランナーのこと。炭そ病感染の可能性が低いことから、採苗して親株として利用できる。

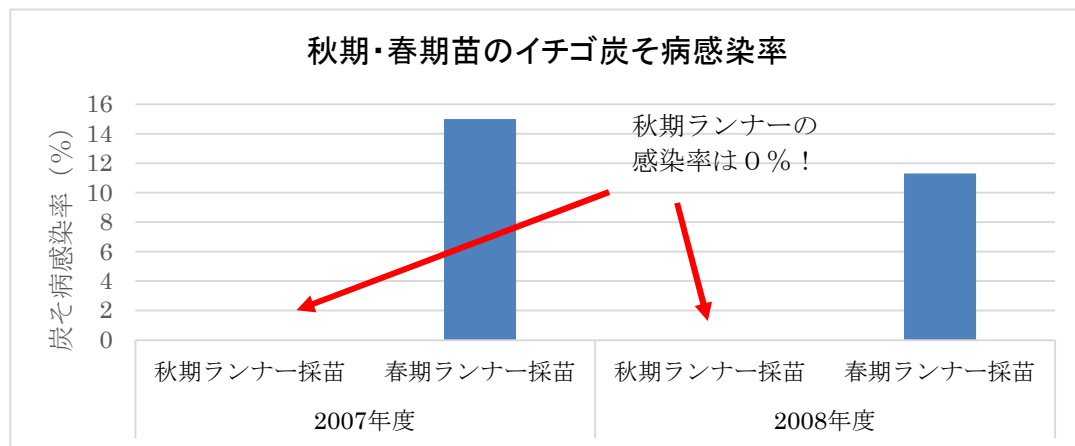


図2 秋期・春期苗のイチゴ炭そ病感染率 「平成21年度福岡県農林業総合試験場成果情報」より

## ◆秋ランナーの採苗方法(例)

- ・ ビニル被覆前に発生したランナーは全て除去し、被覆後のランナーのみを使用する。
- ・ ランナーは、子苗が発根し始めているものを使用する。
- ・ 水を貯めたビンなどの容器にランナーを浸け管理する(萎れ防止)
- ・ 子苗を、鉢受けの要領でポットの培土に固定する。
- ・ ポットへのかん水、容器への水補給に留意する。
- ・ ポットに根がまわったら、速やかに親株床に定植する。



写真4 秋ランナー採苗の様子